
ナルトの世界に転生する事になった訳だが

井平遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナルトの世界に転生する事になった訳だが

【Nコード】

N6635Z

【作者名】

井平遼

【あらすじ】

突然だが、ナルトの世界へ転生する事になった。

神様からちよつと強い眼を貰って頑張ろうと思ってたのだが、産まれる性別を間違えたんだ。

原作順守とかブレイクとか、もうどうでもいいから強く生きるよ。

素人による処女作。そして亀更新必至ですがどうぞよろしく願います。

ブログ（前書き）

読む専でしたが、とち狂って投稿しちゃいます。
どうぞお手柔らかにお願いします。

プロローグ

俺は真っ白な空間に独り佇んでいた。

なぜここに居るのは分からない。気がついたらここに居たわけだ。

「んー……これはテンプレの予感がするね」

二次創作、ネット小説などでよくある転生前によく似ている。

「待たせたの」

これからどうなるのか。どんな世界に転生するのか。むしろ夢落ちだろこれ。等と考えていると、威厳たつぷりの声が響いた。

「えっと、神様ってやつで合ってます？」

むしろ外れて下さいと思いつつ確認をする。

「うむ、一般的にそう呼ばれておる」

合ってた。ちくしょう。

「て事は、俺は死んじゃってこれから転生なんてしちゃうとか？」

「……話が早くて我は助かるのじゃが……もう少し動揺とかせんのか」

呆れた声が響く。

なんか人型の光が喋るのってシュールだな。

「ま、いいじゃないですか。ごねなくて。で、神様が誰かのミスで死んじゃって、現世に戻すのは無理だから異世界に転生して貰うとかそんな感じで合ってますかね？」

「本当に話が早いのか………ついでに言うと、特典で何個か能をやるぞ。一応詫びも兼ねておるので。」

はいはい、テンプレ。

「なるほど。ちなみに転生先はどんな世界なんです？それによって貰う能力が変わってくるんですが」

これは能力貰う前に確認せんとね。
貰ってからその世界じゃ使えませんでしたとか泣ける。

「うむ、それもそうじゃの。転生先はNARUTOの世界じゃ。ちなみに産まれるのは木の葉隠れの里にしといてやる」

「……」

「どうかしたのか？」

「いや、なんか神様からNARUTOとか言われるとメタいなーと」

「……仕方あるまい。お主ら人間の想像によって創られた世界じゃ。それ以外に表現しようが無い」

「へえ？なら他にも漫画などの世界があるんですか？」

人ってそんな力があつたのね。さすが、人の想像力は無限とか言われてないね。

「うむ、有名どころではDRAGON BALLやONE-PIECEかの。DRAGON BALLは本当に管理が大変じゃ………な

んじゃあれは。人や星を好き勝手に生き返らせたりしおつて。こっちの身にもなれと言っに……」

なんか愚痴が始まりそうだぞ。これは早いとこ話を進めよう。

「神様？戻っておいでー」

「ん？ああ、すまんの。思い出したら腹が立つての」

……神様って大変なのね。俺、神になんか産まれなくてよかったわ。

「で、NARUTOの世界って事だけど、能力は何個くらい貰えるんですか？」

「特に何個かは決まっておらんが、常識の範囲内で頼む。チャクラ無限とか不老不死とか言われても無理じゃしの」

「へえ、そんな願うする気が無かったですが、無理なんですか」

「無理じゃ。人間の範囲を越える願いを聞き入れる訳にはいかん……なのに、最近の若いもんは無理難題を言う輩が多すぎていかん。夢を見すぎじゃろ」

ああ、また愚痴りモードに。神様ストレス溜まりすぎじゃね？

「はい、神様戻ってきてー」

「あ、ああ、すまんの」

「いえいえ、では貰う能力を言いますよ」

そっ、言いつつ少し考える。

「えつとですね……やっぱりチャクラは多いに越したことは無いので、九尾くらいってできます？」

確認大事。ちゃんと一つ一つ確認しつつ貰わないとね。

「可能じゃ。しかし、いきなりその大きさのチャクラは無理じゃがな。成長と共に増えていき、成人の頃にはその大きさまでになるじやろ」

なるほど。ま、人柱力でもないのにいきなりそんなチャクラがあったら人間辞めてますもんね。

「了解です。あとは……特殊な眼は欲しいですね」

これは、NARUTOの世界なら誰もが欲しいんじゃないだろうか。

「……写輪眼とかかの？」

「いえいえ、それじゃうちは一族になっちゃうじゃないですか。リクエストしたらその眼が手に入るか確認したいんですが」

「そうじゃの……人の範囲内であるならば可能じゃ」

……あの世界ってどこまでが人の範囲なんでしょうね……輪廻眼とか人外だよな。

「……直死の魔眼って言うて分かります？それを写輪眼とか白眼のようにオンオフできるようにして欲しいです。あと、写輪眼の動体視力やチャクラの流れを見る能力が備わってれば言う事なしなんです」

強すぎず、弱すぎず、無双ができそうで意外とできない。そんな感じの能力がいいよね。

「……まあ、いいじやろ。しかし、それもいきなり開眼はできんぞ

「?ちゃんと修行をして目覚めるのが条件じゃ」

少し悩んでそう言う。

もちろんじゃないですか。いきなり無双したら途中でダレる。

「もちろんです。あとは、努力次第でどの分野でも一流になれる才能が欲しいですね。そんなところです。あ、容姿の設定ってできます?」

欲をかき過ぎてもあれだもんね。でも、容姿はできるならイケメンしときたい。

「うむ、了解した。話が早いし無理難題は言ってこないし、お主は楽でいいの。じゃが、容姿に関しては無理じゃな。こればかりは両親の見目が良いのを願うんじゃないな」

神頼みと言うやつじゃ。と笑う。……神様が。

「……貴方が神様じゃないですか」

呆れてさすがに突っ込んでしまったよ。仕方ないよね。

「ほっほ、比喻じゃよ」

そう言って笑う。ちなみに笑うと光がチカチカしてちょっと面白い。

「さて、もういいかの?よければ早速行ってもらうが」

あ、そうだね。ここで駄弁っても何にもならんね。

「はい、大丈夫です。お願いします」

さて、どんな人生になるのかな。楽しみだな。

「うむ、じゃあ始めるぞ。足元に穴が開いて落ちる事になるが、怖がる事は無いからの」

達者でな。という言葉と共に下に穴が開く。

「いってきます！」

最後にそう言って笑いかける。

これでもう会う事は無いんだろう。胃を大事にして元気でやって欲しいものだ。

「うむ、行ってこい。あ、ちなみに産まれる性別はランダムじゃからの。女になっても強く生きるんじゃないぞ」

え？ちょ！

「ちょっと待てええええええええええ！！」

叫びがこだましながら俺は真っ暗な闇へ落ちていった。

ブログ（後書き）

見切り発車で亀更新必至ですが、投稿頑張りたいと思います。

1話 我が家の朝

カチャカチャ、トントン、グツグツ、フンフンフン。

朝、台所では朝食の準備をする小気味いいリズムと母の鼻歌が聞こえる。

私は食器を出しながらその音を聞く。

産まれてから13年。ずっと聞いているその音は、家族を感じ胸が暖かくなる大好きな音だ。

「アキハ？そろそろできるから父さん起こしてきてくれる？」

母の声が台所からする。

「はい、母さん」

私はそう返事をし、父の眠る寝室へと小走りで向かう。

父は素晴らしい忍であるが、朝はあまり強くない。

強面の父が、寝起きで唸ってる姿がちょっと可愛いとか思ってしまった私はもう末期だろう。

「父さん、起きて下さい。朝ごはんができますよ？」

父は声をかけるだけでは絶対に起きないので身体を揺すりながら起こす。

「うっうん、朝か？」

父のくぐもった声が布団の中から聞こえる。任務に出向く時のキリッとした声とのギャップが酷い。

「そうです。朝です。ご飯冷めちゃいますから起きて下さい」

そう言いつつ、再度揺する。

「うう……あと、5分「駄目です」ううん……分かった、起きるよ」

今日は特に酷いな。

昨日、任務から帰ってきたばかりなので疲れてるから仕方ないのかも知れないが、それでも母の料理が冷める事は許されない。

ようやく起きた父が、まだ寝起きでフラフラするのか、のそのそと歩きリビングへ向かう。

傷だらけの頭の大男がのそのそと歩く様は、小さな子どもが見たら泣くかもしれないな。

などと考えながら父の後を追ってリビングへ向かう。

「あら、あなた。おはようございます」

リビングに入ってきた父を見て、母がにっこりと笑いかけながら言う。

うん、美人だ。なぜ、この野獣《父親》と結婚したのが謎だ。そして、心から母親似でよかったと思う。

「ああ、おはよう」

生欠伸をしながら食卓に着き、新聞を広げる。

「もう、準備終わりますからね」

「ん」

新聞を読みながら生返事をする父。

「あなた？ご飯の時は新聞は読まないで下さいな」
「ん」

またも生返事。

「あ・な・た？」

なんだろうね、同じ笑顔のはずなのにここまで怖いのは。

「わかったよ」

父もそれを感じたのか、苦笑いをしながら新聞を畳む。

「ありがとうございます。アキハ？あなたはお茶の準備してくれる？」

新聞を畳んだ父にお礼を言い、私に話しかける。

それくらいお安い御用だ。未だ眠そうな父のためにも濃い目のお茶を入れてやろう。

「はい」

お茶を入れ、朝食の準備が完了する。

「いただきます」

うん、美味しい。

さすがは母。同じように作っても、いくら上手くいって美味しくても、母の料理には負けてる気がする。多分、お袋の味ってやつなんだろうな。

ちなみにメニューは、父の好物のえのきが入った味噌汁、アジの開き、カブときゅうりの浅漬け、そしてご飯である。オーソドックスだが、それがいい。

「そういえば、アキハ」

しばらく黙々と食べていた父が、思い出したかのように口を開いた。なんだろう。

「はい、なんですか？」

「うん。もうそろそろアカデミーの卒業試験だったろう。大丈夫なのか？」

ああ、その事か。

卒業試験と言えど、分身の術レベルだぞ？

少し真面目にやってれば全く問題は無い。

まあ私の場合、少し真面目にやり過ぎたのだが。

「問題無いと思います。それでも私は優等生で通ってるんですよ？」
そう言って笑いかける。

「そうか。くれぐれも油断と慢心はせんようにな。忍になってからも、それは命に関わる」

満足そうに頷き、そう注意する父。
勿論である。死ぬのだけはごめんだ。2度目の人生、とことん謳歌したい。

朝食も終わり、のんびりとお茶をする。

まさに至福タイムだ。この世界に緑茶があつてよかった。

「アキハ、そろそろ準備する時間じゃないの？」

台所で洗い物をしている母に声をかけられ、現実へと引き戻される。
てか、そんな時間か。

「おっと、もうそんな時間か」

席を立ち、湯のみを下げて自分の部屋へ向かう。
机の上にあつたカバンを持ち、リビングに戻り、弁当を渡される。
忘れ物は無い。

「それでは、父さん、母さん、行ってきます」

そう言つて、軽くお辞儀をする。

なぜか、こんなお嬢様のような事をするのが定番になつてしまつたが、両親の目がいつもより暖かく感じるので良しとする。

「はい、頑張つてね」

「しっかりな」

両親も微笑んで送り出してくれる。

「はい！」

駆け足でアカデミーに向かいながら、今日は何が起きるのだろう、今日のお弁当はなんだろう、と考える。

自分の周りは至極平和だ。

そして、優しい両親や友達に囲まれて幸せだ。

これでちゃんと男に生まれれば言う事無しだったんだけどな。

考えても、どうしようもない事をばやきながら今日も駆ける。

1話 我が家の朝（後書き）

アドバイス等、頂けますと助かります。

2話 演習場にて（前書き）

たった1日で800越えのユニーク。

正直、驚いています。本当にありがとうございます。

お気に入り数も目指せ二桁！ただだけに目標に届いてしまった！

…

2話 演習場にて

午後、私達は手裏剣の実習のために、アカデミーにある演習場へ来ている。

ちなみに女子の演習はさつき終わった。

ナルトがサクラの番で「サクラちゃん頑張れー！」とうるさかったり、私の番の時に、何人かの男子が「アキ八様ー！」と叫んでいた事なんて気にしない。気にしないったらしない。

男子も順調に進んでいく。

チョウジ・シカマル・キバと可も無く不可も無くといった感じ。

ま、シカマルはやる気の無いせいだろうけど。

シノはやっぱり優秀な部類に入るみたい。同級生の中じゃ抜けてる。

「次、うちはサスケ！」

あ、サスケの番だ。

ここは耳を塞いでつと。

「「「「「キャー————！！！！サスケく——————ん
！！！！」」」」」

うーん、女の子の歓声《喚声》って耳に刺さりますね。

や、自分も女の子なんですけどね。サスケのどこがいいのか分からない。ムツツリっぽいし。

「はじめー！」

そんなくだらない事考えてたらもう始まるみたい。

サスケが手裏剣を持って構える。

それだけで何人かの女子が歓声をあげそうになるが、隣の女子が押さえる。うん、偉い。

そうしている内に次々と投擲されていく手裏剣。

それは、この年齢と下忍ですら無い事を考えると、異常な速度と正確性であった。

ほんの数秒で10個の手裏剣を投げ終え、中心を捕らえ切れなかったのはわずかに2個。

天才うちのは名は伊達じゃないといった感じだろうか。

そんな感じで関心していると、背後から異常なまでの歓声があがる。

「「「「「キャー！ー！すごーい！さすが、サスケ君！ー！」」」」」

もう、これでもかってくらいの黄色い歓声が演習場に響く。

油断したよ。耳鳴りが酷い。そして頭がぐわんぐわんする。

つい最近、父に「油断と慢心は禁物」と言われたばかりなのにね。ん、ちよつと違うか。

「静かに！次、瀬田コテツ！」

イルカ先生が注意と共に次の生徒を呼ぶ。

一回注意するだけであれを静めるとはさすがは教師と言った感じが。

「はい」

間の抜けた声と共に前に出る男子生徒。

どう見ても「るる剣」に出てくる縮地のあの子に見える。

「はじめ！」

掛け声と共に音の消える演習場。

そして、気がついたら全ての的の中心に手裏剣が刺さっていた。

「…………え？」

誰かがその声をもらす。

それも仕方あるまい。私にだって、なんとか見えたというレベルだ。普通のアカデミー生徒に見えるわけが無い。

「先生、できましたー」

そんな啞然とした空気に気付いてないのか、気にしてないのか、やった本人は間の抜けた声で先生に声をかけた。

「ん？あ、ああ、よくやった。戻っていいぞ」

目を丸くしていたイルカ先生は、それで現実に戻されたようだ。

「はーい」

そう言っただけでスタスタ元居た場所に戻っていく。

「すげー！コテツ！あれ、どうやったんだってばよ！？オレにも教えてくれ！！」

ナルトが興奮して叫んでいる。

それも仕方ないだろうね。今の彼じゃ、何がどうなったのか分から

ないだろうし。

「えっとねー。こう……シュパン、シュタツ、スタタタンって感じ」

……「ナルトに次ぐバカ」の異名は是故か。

「訳が分からねーってばよ……」

だよ。擬音で表現されても理解できるわけが無い。某ミスターじやあるまいし。

「次！木川マサムネ！」

そうこうしてる内に次が呼ばれる。
この次のナルトでラストだったかな。

「はい」

クールと言った表現の似合う声で、どう見ても子どもセフィロスな顔をした生徒が前に出る。

その手にはやる気に満ち溢れているのか、既に手裏剣が握られている。

「あ」

そんな声と共に思い切りずっこける某セフィロス。

「『『『あ』』』」

そんな声をあげる周りの生徒達。

それもそのはず。彼の握っていた手裏剣がイルカ先生の手足や腹部に刺さっているのだ。

[illegible]

全員が全員叫ぶ。

「わ、わざとじや……」

起き上がり、それを見たマサムネはそう声をもらす。

「当たり前だってばよ！？わざとイルカ先生に攻撃するやつがあるか！てか、どうやって転んだら、後ろに立ってるイルカ先生に当たるんだ！？」

そう、彼は普通にイルカ先生を追い越し、指定位置に向かったのだ。そして、指定位置の直前で転んだ。普通に考えたら後ろで見守るイルカ先生に当たるわけがない。

「くっ……どうして俺はこうドジばかり」

そう、もらし俯く彼。

「ドジってレベルじゃねーってばよ！？これ！」

「皆！落ちていて。イルカ先生も大した怪我じゃないからね」

補佐に就いてたミズキ先生が事態の收拾を図る。

「私は、イルカ先生を医務室まで連れて行くので今日はここまでにしよう。では、解散！」

ミズキ先生がそう言うと、皆が帰り始める。

まあ、これじゃ続けられないものね。

「え？ちよつと待って！オレってばまだやってねーぞ！？」

ああ、ナルト最後だったもんね。どんまい。

「……ふんっ、ドベのお前はやつてもやらなくても変わんねーだろ」

なぜ、サスケは挑発するのか。

「ああん？どついう意味だつてばよそれ！」

ナルトは本当に律儀に挑発に乗るし……バカばっかだね。

「ああ、あれだ。むしろ減点されずに済むからやらなくて助かったんじゃねーか？」

ナルトはもう限界と言わんばかりにプルプルと震えている。

きつとサスケに勝負を吹っかける流れになるに違いない。

「じょおとーだ、サスケえ！表に出やがれ！オレと勝負しろってばよ……！」

……今、表だよナルト。

「バカが。今、表に居るじゃねーか……」

サスケは呆れた風にそう言い残しスタスタと帰り始める。

待てっばよおおおおお！

演習場にナルトの叫びが木霊した。

今日も平和である。

2話 演習場にて（後書き）

瀬田コテツ、木川マサムネ

オリキャラ2人登場させました。

会話と文の継ぎ目と言いますか。
小説って本当に難しいですね……

3話 班分け（前書き）

オリキャラ追加です。

そしてキリのいいところまでと思ってたら、結構な長さに。

そして、作者はおっさん燃え（萌え）なのを予め明記しておきます。

3話 班分け

閑話

早朝、まだ夜も明けて間もない頃、惘然とした面持ちをした老人と、悠然とパイプをふかす老人が火影の政務室に居た。

2人が黙り込んだまま動かなくなって、既に4半刻が経過している。

「はあー……なんで引退した爺の自分が孫くらいの餓鬼の面倒を見なくてはならんだ。のう、三代目」

黙りこくっているだけでは埒が明かんと諦めた、老人（仏頂面）が溜め息混じりに声を出す。

「そう言うな、伊賀翁。お主に預けたい子等は一筋縄ではいかん問題児でな。若い上忍では心許ないのじゃよ」

苦笑いを浮かべ、三代目と称された老人は言った。

「なんじゃ。うちとは九尾でも面倒見させる気か」

そんな面倒な事、御免だと言わんばかりに顔を顰める。

「違うわい。そこまで問題児では……いや、ある意味あの子等以上の問題児だとも言えるが」

そう言いながら、苦笑いを更に深める。

語尾が小さくなっていったのはご愛嬌といったところだろう。

「そんな問題児共なら余計に御免じゃ。他にやらせい」

自分のはのんびり盆栽を育てたい。と盛大に顔を顰めながら言い放つ。

「まあまあ、一人は中々に優等生じゃし、それに3人とも素晴らしい才を持った子じゃ。お主、才能のある子を見るのは好きじゃろ？」

それはそうじゃが、と零す伊賀翁の声を無視して三代目が続ける。

「それに、ワシ等ももう長くは無い。ここらで持つてる技を若い新芽の糧とするのも悪くは無かるうて」

のう？と穏やかに笑う三代目を見て、伊賀翁は黙ってしまふ。

どれくらい時がたったのだろうか。

外からは里が起き出して活気のある声が聞こえ始める。

「……そうじゃの」

そう、ポツリと声をもらす。

「引き受けてくれるか」

もらった声だけで、老人には答えは分かっただろう。深い笑みを浮かべ確認をする。

「うむ、引き受けよう。しかしあれじゃぞ？自分は優しくできん性質でな。その子等が忍になれんでも文句は言ってくれるなよ？」

そう言いつつ、席を立つ。その顔には楽しそうな笑みが浮かんでい

た。

「もちろんじゃよ」

心配せんでもあの子等は立派な木の葉の忍となろう。

半ば確信を持って、そう考えつつ伊賀翁が出ていくのを見送る。

しばらく出て行った扉を見つめた後、彼は窓の方へと目を向ける。

眼下では、小さな子ども達が走り回ってるのが見える。

「元気があってよいの」

そう嬉しそうに微笑む瞳には、優しい笑みと暖かで穏やかな炎が灯っていた。

閑話 終

今日は合格者説明会だ。

いつものくノークラスでは無く、大教室へ向かう。

卒業試験？分身を三人出して、それぞれをイルカ先生、ミズキ先生、そして三代目様に変化をさせたら褒められた。

余裕すぎる。

それはさておき。

教室に入ると既にナルトとサスケが睨み合っている場面だった。

この後、本当にコイツらはキスをしちゃうんだろっか。

そんな事を考えていると、ナルトの後ろをマサムネが通ろうとする。

あ、こける。

椅子にぶつかり、よろけるマサムネ。

そして、咄嗟に手を突こうと伸ばした先には、ナルトの背中があった。

………

………

この後どうなったかは、彼らの名誉のためにも黙っておこう。
結果として言えば、ナルトがボロ雑巾のようになったと言う事だけだ。

現在、イルカ先生の班分けの説明がされている。

3人1班で担当上忍が付く。うん、原作通り。

班分けも、力が均等になるように先生が独断と偏見でもって決めたらしい。これも、原作通りだね。

1班、2班……と次々に班分けが発表されていく。

その度に、友人と一緒になれたかなどの一喜一憂する声があがる。

「じゃ、次7班」

お、主人公チームだ。

このチームに入らなければ、原作ブレイクはかなり厳しい。
だけど、やっぱりあの3人が一番しっくりくるとも思うんだ。

「春野サクラ……うずまきナルト！「ヤッター！」それと……うち
はサスケ」

「しゃー！んなるー！！」

ナルトといい、サクラといい、もっと隠すというかそのー……ね？
オープン過ぎやしませんか。

その後ナルトがサスケと一緒に事に文句を言い、怒られるという一連のテンプレがあつたが、滞りなく班分けは進む。

「次、8班いくぞー」

確か8班は紅班だったかな。

「えー……犬塚キバ、油女シノ、そして日向ヒナタだな」

キバはヒナタと一緒にの班という事で小さくガッツポーズをしている。
うん、ナルトとサクラは彼の憤ましさを見習いなさい。……ま、お相手のヒナタはナルトと一緒にじゃないから少し落ち込んでるが。

「次、9班！」

お、次か。9班って原作に出てきてたっけ。記憶に無い。

「森乃アキハ……木川マサムネ！あとは、瀬田コテツだ」

おおう、私9班か。……てか、寄りによってあの2人と一緒か。

因みに10班は、猪鹿蝶トリオだった。これも原作通りだね。順調順調。

午後、自由時間を経て私達はもう一度教室に集まっていた。

担当上忍を紹介して貰うためだ。

6班までは既に退室済み。が、7班の担当は来ない。うん、知ってた。

ガラッ

扉の開く音がし、女性が入室してくる。

やっと来たのか、とナルト、サスケ、サクラが顔をあげる。

「8班の子はこっちに来て」

なん……だと……と言わんばかりに目を見開いて啞然とするナルトとサクラ。顔を顰めるサスケ。

それをチラチラと横目に見ながら前に向かうヒナタ一行。

ヒナタがナルトに対して小さく手を振るが気付かない。……気付いてあげなさいよ。

落ち込んだヒナタを見ていると、担当上忍が「頑張ろうね」とヒナタの頭を撫でていた。

なに、あの班。羨ましいんですけど。

ガラッ

また扉が開く。

そして入ってきたのは180近くある筋肉質なお爺さんだった。

「9班はこちらへ」

あの人が担当なのね。

「……なんか、協調性の余り無さそうな面子じゃの」

集まった私達に一瞥をくれ、そう呟く。

……少なくとも私は人並みにあるつもりですけどね。

「まあ、ええ。行こうかの」

そう言つて、スタスタ出て行ってしまうので、慌てて追いかけた。

私達は今、公園へ来ている。

「さて、それじゃあ自己紹介から始めようかの」

「じこしょうかいってなにを言えばいいんですかー？」

間延びした声でコテツが聞く。

なんかコイツの喋り方って平仮名多いな。

「そうさの……好きな事、嫌いな事、将来の夢や趣味ってところかの」

まずは自分から言うかの。と続ける。

「自分は伊賀三太夫。好きな事は…盆栽じゃな。嫌いな事は、盆栽を倒して逃げる野良猫じゃ。将来の夢は、いち早くお主らの担当を抜けて家でのんびりする事かの」

……なんか不合格にすると暗に言われた気が。

「では次、お主から順に行こうかの」

あ、私が指名された。私から順に左へって事らしい。

「森乃アキハです。好きな事は鍛錬と料理で、嫌いな事は……大切な人が傷つく事。将来の夢はアカデミーの教師です」

将来の夢が地味だつて？ いいんだよ。楽しそうじゃなか。

「うむ、では次」

「……木川マサムネ。好きな事は鍛錬。嫌いな事は……自分が偶にドジを踏む事。将来の夢は、ある巻物を探し出す事と、里に自分有りと名を広める事」

……ドジって自覚あったんだ。そして巻物ってなんだろう。

「では、最後」

「はい、瀬戸コテツです。好きなことは、ねることかな。嫌いなことは……無理矢理おこされること。将来の夢は、あんしんして眠れる世の中かな」

将来の夢はいいと思うが、寝る事ばかりだな。
心なしか伊賀翁も呆れた顔してるぞ。

「では、自己紹介はここまでにして、明日やる任務の内容を伝える」

お、サバイバル演習だっけ。

「それは、脱落率66%以上の難関試験。サバイバル演習じゃ。脱落した者は問答無用でアカデミーに戻る事になる」

やっぱりサバイバル演習か。しかし、カカシ先生みたく、煽ったり

焦らしたりしないね。

「……驚かんのう。お主ら」

私達の反応が予想外だったのか、ちよつと驚いた風にそう呟く。

「さすがに分身の術のみで下忍になれるとは思えませんでしたので、何かあるんだろうな。と、考えてました」

私がそう言つと、他の二人も揃つて頷く。

……マサムネは兎も角、コテツ。お前は本当にそう思つてたのか？
ちよつと信じられないぞ。

「なるほどのう。まあ、自分は細かく説明する手間が省けたので助かったが」

その後、概要の書かれたプリントを渡され、朝食は吐くおそれがあるので抜く事を進める旨を言われた。

や、朝は食べますよ。

母に怒られますし、美容のためにもよろしくありませんから。

3話 班分け（後書き）

感想、アドバイスを頂けますと嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6635z/>

ナルトの世界に転生する事になった訳だが

2011年12月24日00時47分発行